
ムシウタ ～夢捕らえる蜘蛛～

朝人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムシウタ ～夢捕らえる蜘蛛～

【Nコード】

N5256V

【作者名】

朝人

【あらすじ】

テンプレ通りに死んだ少年が次の生を授かったのは『ムシウタ』の世界。そして憑かれた“虫”は、特に珍しくもない普通の分離型の“虫”。
どう見ても一号指定（最強）には程遠い力で何とか生きて行こうと頑張る………かもしれない話。

なんとなく思いついたので書きました。オリ主は転生者です、苦手

な人はUターン。

プロローグ（前書き）

思いつきで何となくやってみた。

プロローグ

唐突だが、俺こと三野元は転生者である。十年とちょっと前にデンプレな展開で死に転生したのだ。ちなみに、転生先の世界については選べなく、ランダムに決められた。とりあえず有名な作品の世界に行きたいと思っていたのだが……結局死ぬ前と特に変わらない世界だった。

魔法や魔術やらに憧れていたが、俺が知る限り現在生きてる世界には有名な作品の舞台になる街の名前は一切なかった。

つまらないな……等と思いながらも小学校最後の春休みを満喫している時だった。

赤いコートの女性が目の前に現れて、ある質問をした。

「——貴方の夢をきかせてくれない？」

何処かで聞いた事のある台詞だなと思いつつも、ついそれに応えてしまった。そして、その瞬間俺の意識は途絶えた。

次に目を覚ました時女性はいなく、代わりに一匹の蜘蛛がいた。そいつを見た瞬間、あの女性の言った台詞。それが出てくる作品を思い出した。

『ムシウタ』——下手なファンタジーよりも危険を孕んだあの作品を……。

そして、あの女性——“大喰い”の質問に応えた時点で、俺は既に引き返せない状況に陥ってしまっていた……。

プロローグ（後書き）

ムシウタの二次のオリ主って、基本『同化型』か『特殊型』が大半だから、あまりいない『分離型』でいってみよう。と思って書いてみた。

分かると思うけど、“かつこう”に勝てる程強くありません。寧ろ瞬殺される。

晴れて“虫憑き”に……（前書き）

とりあえず、暫くは一人称でいってみようと思います……。

晴れて“虫憑き”に……

カタカタとキーボードを叩く音が静かに部屋に響く。

ある単語を入力し、ネットを使って調べる。マウスを動かしてクリックする事数回、未だに探しているモノは見つからない。

「……ん？」

その時、むず痒い感触が肌に伝わる。感触の元は肩から腕に、そして右手へと走る。

マウスを握っている手の甲から一匹の蜘蛛が這い出て来た。

脚の長い黒い蜘蛛——これが、俺の“虫”。名前や種類は知らない……と言うより見た事もない姿をしているから現在ネットで検索中。

“大喰い”——エルビオレーネに夢を食われた俺は、どうやら晴れて分離型の“虫憑き”になったらしい。正直、嬉しくない……『ムシウタ』の世界ならせめて特殊型か同化型がよかった……。だって、分離型ってほとんどメリットないじゃん……“大喰い”に能力使われるし、“虫”は殺され易いし……おまけに俺の“虫”が蜘蛛って事は空飛べないから逃走手段が地上しかないし……。

「……駄目じゃん……」

考えれば考える程どツボに嵌まっていく。分離型の利点って何？ラスボス補正とか？いらんわそんなもん。

更に蜘蛛って、どうなのよ……糸を吐く以外に攻撃方法知らないんだけど……。てか、原作でも蜘蛛の使い手ってロクな目に合っ

なかった様な……もしかして、俺……詰んでる？ 死亡フラグ立ちちゃった？

「は、はは……」

最早、渴いた笑いしか出ない。

これはないだろ……せめて特殊型なら、そう簡単にはやられないのに……。

何か特殊能力がある事を期待したいが、迂闊に“虫”を使うと特環に見つかる可能性があるのでやめておこう……。

「にしても……お前一体何のクモなんだよ……」

脚が長いから短絡的だが、アシナガグモかとも思ったが……アシナガは胴体も長いのが特徴だ。しかし、コイツの胴体は『大きい』。『細い』のでも『丸い』でもなく『大きい』のだ。

アシナガ並の脚に、それに身合う程の巨大な胴体……タランチュラの様にも見えるが、あれほど毛深くはないし、それ程丸みを帯びている訳でもない。

どちらかと言うとRPGゲーム等に登場しそうなフォルムをしている。

「つか、これからどうしよう……」

“虫”の事も気になるが、“虫憑き”になったら直面する問題もある。

『成虫化』——ほつといたら夢を食い尽くされて死ぬんだよね……それは嫌だな。だが、“虫”を殺され『欠落者』になるのも嫌だ。そして戦うのも嫌。

我が俣を言ってる様に聞こえるが、実際問題この世界はかなり危

険だ。迂闊に動いたら本当に死にかねない……俺か“虫”が。特に
一号指定の奴らに会ったら、俺なんて瞬殺だろう……いや冗談抜き
で。

「ああ……マジで詰んでるよ……」

何処に行こうとも死亡フラグしか見えない。本当にどうしたらいいんだよ……。

晴れて“虫憑き”に……（後書き）

分離型だけの利点ってなんだろう……。

巨大化？ 物理攻撃が出来る？ 一人で二体以上の“虫”を宿す事がある？

むう……本気で利点分からない……。

日記みたいな物（前書き）

今回で一気に時間が跳びますので注意。

日記みたいな物

○月×日

今日から記録（日記）を書く事にした。

唐突だが、多分今俺が置かれている状況を知ったらほとんどの人は同情する事だろう……。

結論から言おう……………特環に捕まりました。

あの日、俺の“虫”について調べた日。何がという訳か、家に強盗が押し入りました……。

今にも殺しそう雰囲気で、冗談なんて一切通じなさそうな切羽詰まった感じだったな……。恐らくは借金か何らかの理由で金が欲しかったのだろう、この世界での俺の両親はそれなりに稼いでおり、一軒家も持っていた。だからウチに押し入ったのだろうが、それが悪かった。

色々と問答があり、埒が開かないと思った犯人は子どもの俺を人質に捕ったのだ。

これには俺も両親も焦った。まさかそんなドラマみたいな展開になるとは思わないし、犯人には本当に後がない気配があった。

そして、身の危険を感じた俺はつい無意識に“虫”を使ってしまった。

突如現れた大人一人程の大きな蜘蛛。犯人の驚いた隙を逃さず、蜘蛛の糸で拘束。強盗に関してはそれで終わったのだが……息子が“虫憑き”であった事のショックと“虫”の恐怖からか、両親は怖れて警察に通報してしまったのだ。

それからの展開は大方予想が着くだろう。

特環に捕まりたくなかった俺は何とか逃げ出すものの、個人と組織では明らかに個人の方が不利だった。粘るだけ粘ったが、結局は囲まれて万事休す。

そして、追い討ちをかけるかの様に、アイツ——“かつこう”まで出て来た。この時点で降伏したよ、当たり前だけど……。

相手——一号指定の主人公、どう考えても戦ったら百パー俺が負けるわ。

そんな訳で、大人しく捕まりました。そして……。

「何してる？」

「ん？」

不意に声が聞こえ、視線を上にとけるとそこには、絆創膏以外特に特徴のない、見た目『普通』の少年——薬屋大助がいた。

人畜無害そうな少年だが、一方裏では敵味方問わず『悪魔』と呼ばれ恐れられている最強の“虫憑き”——“かつこう”である。

ちなみに、“虫”の種類はかなりレアな『同化型』……羨ましい……。

「見て分らないか、日記だよ」

「オレが聞きたいのは、何で今更なのかって事だ」

まあ、大助の言う通り今更ではあるか……何せ、俺が特別環境保全事務局——通称、特環に所属したのは今から一年前だ。

……ええ、なんだかんだで何とか一年生き延びていますよ……ついでにこの間、無指定から十号へと昇格しました。やったね！

「十号に昇格出来たからその記念？」

「何でオレに聞くんた」

……まあ、戌子にしごかれてこれだから……此処（十号）が俺の限界だろう……悔しいけど。

「それより、お前こそどうしたんだ？」

特環の東中央支部。今俺達がいる所はそこだ。……正確に言えば、更にその休憩室みたいな所か。

基本的に一人でいる事の多い“かつこう”は、常に誰かしら一人以上はいる休憩室にはなかなか近寄らない。なのに、わざわざ今俺がいる時にやって来たのだ……絶対何かある、それも悪い感じの物が……。

「仕事だ、“大蜘蛛”」

確信めいた直感を感じ取った瞬間、“かつこう”の口から俺のコードネームが紡がれた。

日記みたいな物（後書き）

強さの位は“火種十号”です。

一応“十号”の中では多少強い方ですが、“九号”以上と一対一^{サシ}でやりあったら負けます。センチメートルにも負けるレベル。強くする予定ではありますが、暫くは小細工ばかり使うと思います。

“大蜘蛛”（前書き）

最近、暑い……。

“大蜘蛛”

——“大蜘蛛”。

実際には存在しない妖怪化した蜘蛛の総称。通常の何十、何百倍もの巨大な蜘蛛の事を表した言葉だ。

特環でも俺の“虫”について調べた様だが、結局は俺と同じで分からず仕舞い。だからか、俺のコードネームは安直だが“大蜘蛛”という事になったらしい。

——時は深夜、雲一つない空に丸い月が浮かんでいた。ビルの屋上にいるお陰か、遮る物がなく良く見える。今が秋なら絶好の月見日和だろう。

春の始めなので夜はまだ若干肌寒い季節だろうが、今は特環のコードネームを纏っているのだから程寒さを感じない。

『準備は出来たかい？ “大蜘蛛”』

ゴーグル越しに聴こえる男性の声。俺のコードネームを言ったのは、東中央支部の支部長である土師圭吾だった。

「今からやる所ですよ、『アレ』は精神削るんで、話しかけないで下さいよ」

他の“虫憑き”とは違い、俺は彼を嫌う理由は特にない。だからか偶に話す時もある、しかし“かつこう”程親しい訳ではないから

二、三返事で終わる事が多い。

そして、今から俺は仕事をしなければいけないので、一々構って暇はない。

『健闘を祈るよ』

「それは前線にいる“かつこう”にでも言っておいて下さい」

『彼は強いから問題ないよ、キミと違ってね』

「はいはい、どーせ俺は雑魚ですよー」

むかつく言い方だが、それはアイツの性根がねじ曲っているから仕方ない、軽くスルーしよう。

「んじゃ、今から“巢”を使っんで切りますよ」

『ああ、わかっ——』

返事を待たずに通信を切る。

いつからいたのか、右肩に乗っていた黒い蜘蛛がそこから飛び降り、地面に着地。俺のコードネームと同じ名前の“虫”——“大蜘蛛”は、まるで風船が膨らむ様に、一瞬で俺よりも大きな身体へとその姿を変える。

そして針の様に鋭利な脚を適当な場所に突き刺すと、細くて薄い糸の束が“大蜘蛛”の脚に纏わりついた。

昼間、“かつこう”から仕事の話聞いた後、俺は急いで下準備に入った。街のあちこちに俺の“虫”の糸を張ったのだ。街は常に並木の様に建物立ち並んでいる、だから糸を張り易い。

このビルを中心として作った巨大な“巣”。その中に数体の獲物が入る気配があった。

特環の作戦メンバーは既に入っており、新たな戦力が入る場合は一番に俺に連絡が来る様になっている。故にこれは……。

「――敵か」

糸が数本切れた感覚が、蜘蛛を通して伝わる。

「“大蜘蛛”より各班へ、獲物が“巣”に入った。細かい情報は追って連絡する……逃がすなよ」

“かつこう”も出てるから大丈夫だと思うが、一応念を押しておく。

“巣”は一から作る場合最低でも数時間は時間を要する。首都クラスなら、最悪丸一日以上は掛かる面倒な物だ。

わざわざ昼から任務が始まる二時間前までずっと走り続けて作ったのに、逃げられたとあつては俺の努力が無為になってしまう。そんな事は許さない……逃がしたやろうは殴る、絶対に。

「――掛かったか」

その時、断続的に糸が切れる感覚が伝わる。恐らくはターゲットの内の一人だろう。

感知用の糸は、基本百m間隔に一本ずつ設置している。よくアニメや映画のダンジョンにある罠の様な感じに張ってある……地上から三m以上の位置に。

そうする理由は、無論一般人が引つかかり無駄に切れない様にする為と、もう一つ。今回のターゲットは複数で全員が分離型の“虫”らしい。しかも飛行能力を有する。

「……切れる間隔が早くなった……他の奴らも“虫”を使い始めたか」

逃げる為……ではなく、恐らく奇襲する為に出したのだろう。持たらされた情報によると、今回の奴らはかなりの過激派との事。無指定とはいえ、特環の“虫憑き”を数名『欠落者』にしている。もしかしたら号指定クラスの実力者もいるかもしれないな。

再び糸が切れる感覚が伝わる、今度は数秒間に複数。到底常人には出せない速度だ……ま、お陰で位置は大体検討が着いた。

「“大蜘蛛”よりA班へ……」

回線を開き、ターゲットが仕掛けるであろう班と情報処理班全てに次々と連絡を入れる。

これで彼らの奇襲は既にその意味をなくした。“巣”によって得られる情報は正直そこまで正確ではない。しかし多少正確でなく、ある程度誤差が生じて、そこは情報処理に特化した後方の方々が、修正し再度正確な情報が持たらすので今の所問題はない。

「始まったか……」

数分もしない内に公園の方で大きな爆音が一つ、恐らくは“かつこう”のだろう。それを皮切りにあちこちで破壊音や“虫”の咆哮が聞こえ始めた。

「さて、あとはドンパチが終わるまで……見物……」

役目を終え、“虫”をしまおうとした瞬間、感知用の糸に反応があった。それだけなら然して何もない、いつもの事なのだが……そ

の反応が段々近づいて来るのだ……こちらに向かって。

車に例えると時速六〇八十km程の速さだろう、かなりの速度で俺がいるビルに向かって来る。

「マジかよ……」

糸の中には感知用の脆いやつの他にも、罠用に鋼糸やピアノ線のように鋭い物も存在する。実体のある無指定の“虫”なら、問題なく両断出来る程の切れ味だ。……だが。

「マズイな……」

ちゃんと鋼糸が切れる感覚は伝わるのに、対象のスピードは尚も落ちない。ダメージはほとんど与えられていないだろう……確実に号指定クラスだ。

「どっかの奴らがミスったのか、それとも単純に隠れていただけか……とりあえずは、逃げるに限る！」

糸の維持と切断、消滅は俺の意思一つでどうにでもなる。故に“大蜘蛛”の脚に絡まった糸の束をすぐに全て解き、その背中に乗る。そして、その巨体からは想像出来ない脚力で屋上のフェンスを飛び越える。

直後、大きな爆発音が後ろから聞こえた。落ちる間際、音の発信源と思わしき砂埃が舞う中心にコクワガタの様な姿をした“虫”を一瞬視界に捉えた。

“大蜘蛛”（後書き）

蜘蛛と言えば、やはり“巣”だと思ったのでやってみた。

感知と罠が街中のいたるところにあり、おまけにかなり見え辛い仕様。蜘蛛の巣に引っかけた人ならそのうざさは分かるはず……。

“大蜘蛛” 2（前書き）

一人称視点でがんばってみたけど……果たしてどうだろうか……。

“大蜘蛛” 2

——落ちる。重力に従い下に……地面に落ちる。

「——“大蜘蛛”——！」

空が遠退き、地面が近づく。俺と“虫”が危険を感じたのはほとんど同じだった。

声が出た瞬間、“大蜘蛛”は糸を地面に向かって吐き出す。それは良く言って毛糸、悪く言えば毛玉の様な形で、地面に触れた瞬間弾ける様に球体からマット状の形に姿を変える。自分の軀よりも少し大きなそれに“大蜘蛛”は寸分狂わずど真ん中に着地する。

低反発顔負けの衝撃を吸収するそのお陰で、“虫”も俺も無傷だった。

「やっぱ……三十階からの飛び降りにはキツイな……」

なかなか慣れそうにない感覚とその恐怖に軽く身震いする。一応訓練で落下上昇は何度かやった事があるが、それでも最高十階程の高さが限界だった。

練習なしのぶつつけ本番でよく成功したものだ。我ながら褒めてやりたい所だが、今は逃げるのが先決だ。

「はあ……」

“虫”に乗ったまま近くの横道に入り込むと、安堵の息が漏れた。しかし、まだ危険な事に変わりはない。だから俺は——“虫”から降りた。

そして、“大蜘蛛”に右手を添えると、“虫”の軀は次第に小さくなり、三十cm程の大きさになると長い脚を使い器用に右腕にしがみ着く。

八本の長い脚ががちりと腕を捕らえ、ちよつとやそつとでは全く離れる気配がない。

俺の“虫”——“大蜘蛛”は純粋な分離型だ。軀を大きくし、系によつて相手を捕らえる。ただそれだけの普通の分離型。

ただ、系の材質を自在に変えられる事が唯一の利点だろう。餅の様に柔らかいものからゴムの様に伸縮性を持つもの、鋼系の様に鋭いものまで様々な系を出す事が出来る。

しかし、それだけでは生き残る事が困難な為どうするか悩んだ結果、装備タイプの“虫”を参考にした。“虫”その物が一つの武器になる、分離型の中でも珍しいタイプだ。

色々な装備タイプのデータを見て、試行錯誤した結果、たどり着いたのがコレだった。

腕をがちりとホールドした姿は、まるでガントレットの様にも感じられる。

純粋な装備タイプと違い、“大蜘蛛”そのものは武器としての意味はあまりなさない。だが、ただ一つ——系を操るといふ一点にだけ特化している。

「ちツ——!!」

“虫”の羽音が聴こえ、振り返ると先程のコクワガタが見えた。照準を定める様に、俺にハサミを向けた瞬間、まるで爆発したような加速力で一気に距離を詰めた。

そして、次の瞬間には凄まじい轟音を発て、地面にクレーターを

作る。

普通に考えて即死級の威力だ。今の威力を考慮してもコイツが無指定な訳がない……俺の予想だが、八号クラスの力を秘めていると思う。恐らく、今までこの方法で多くの虫憑きを倒してきたのだろう。

『一撃必殺』——正にその言葉を体現した様な“虫”だ。

「ま、俺はそう簡単にやられてやらないけど」

獲物がいない事に気付き、すぐに捉えようとキョロキョロと辺りを窺う。その動きが少し面白くて、つい吹き出してしまう。

「あ……」

それに気付いたのか、コクワガタが上——ビルの中腹に文字通りぶら下がっている俺を見つけた。

右腕に着いた蜘蛛の口から出た糸が、ビルの屋上の柵から垂れている。この形態の扱い方は何度も練習したので、咄嗟の事でもこれ位の回避は出来たりする。

宙吊りになっている俺にコクワガタが照準を合わせると、俺が糸を切ったのはほぼ同じタイミングだった。

重力に従い、地面に吸い寄せられる様に落ちる俺の少し上をコクワガタが通過する。そして、その爆発的な加速力により、ビルの中へと突っ込んでしまった。

「……………」

これの損害賠償って俺の給料から引かれないよな……とか思いつつも、俺は隣のビルに右腕の照準を合わせると蜘蛛の口から新たに

糸が吐き出された。それは屋上の縁に当たると、勢いよく縮んでいく。

後少しでぶつかりそうなところで糸を切り、新たな糸で他のビルの縁に当て、そしてまた……以下略。ほとんどこんな感じで移動する。気分は猿かター○ンだ。

コクワガタが突っ込んだビルからある程度離れると、後ろで大きな爆発が聞こえた。

見ると、件の“虫”が勢いよくビルから飛び出して来た。先程凄いスピードでビルに突っ込んだというのに、その軀には傷一つ付いていない。

“かつこう”等、一号指定が相手の場合どうしても雑魚に感じてしまうが、分離型の中でも甲虫の姿をした“虫”は、実の所かなり性能が良い。十号やその辺りの強さの者には十分に脅威になる。

並の攻撃を遮る重く強固な軀、そしてそれを飛ばせる羽。特殊型とは違う、象や熊の様に重く巨大な“虫”が自由に空を飛ぶ。分かつと思うが、そんな巨大なものが自動車並の速度で空を駆る、最早それだけで脅威だ。

——特にそれが、クワガタやカブトの様に凶器を持つものなら尚の事……。

「——ッ!？」

風を切る音の中、また羽音が聴こえた。反射的に後ろを振り向くとコクワガタが既に俺を照準に捉えていた。そして、瞬きをする暇もなく突撃してきた。

糸を支点に『俺』という重りを振り子の様に振る。単調な動き故にそのパターンを読まれたのだろう……。俺が次糸を切るタイミン

グまで読んで、コクワガタがハサミを大きく広げながら迫ってくる。無論、空中で且つ命綱とも言える糸が切れたタイミングで来られたのだ。回避する事などほぼ不可能だし、相手もそれを理解していた。だからこれで終わると思っていた……お互いに。

「え……？」

だが次の瞬間、“大蜘蛛”が俺の意図とは別に新しい糸を出したのだ………八本ある脚の内一本から。

それにより、軌道とタイミングが大きく変わった事でコクワガタは標的を失い、そのまま街道の空を駆けていく。

それを見送ると、俺の体は大きな衝撃に襲われる。

「かぁッ——！？」

左腕から伝わる痛み。それが最初は何なのか全く理解できなかった。だが、痛みで途絶えていた意識と視界が戻るとようやく自分が状況を理解した。

どうやら俺は無理な軌道変更された為、ビルに打ち付けられたらしい。それもかなりの速度で。

結果、左腕から叩き付けられた俺はあまりの痛みと衝撃で一瞬意識を失った様だ。

「——ぎいい！！！！？！！？！！」

このままでは危ないと思い、降りようと体を動かすと左腕と肋からハンマーで叩かれた様な鈍い痛みが走り、奇妙な悲鳴を上げてしまった。

「お……折れ、て……ううッ！！！！？」

最低でも左腕は折れているのが分かる。何故なら動かそうとしても全く微動だにしないくせに、痛みだけはよく響くのだから。

「ツツツ——！！！！！！」

襲い来る痛みにはたすら耐え、声を押し殺しながら俺は地上に降りた。

この状態では思う様に逃げられない。でも逃げないとまたあの“虫”が襲ってくる。しかし、逃げたくても走る事が出来る程の体が無事な訳ではない……恐らく歩くので精一杯だ。

詰んだな……そう思いながら、こんな状況に追いやった原因に目を向ける。

四つの目玉を持つグロテスクな外見の俺の“虫”。そいつが今嘲った様な気がしたのは気のせいではないだろう。元々戦闘に特化している訳でもないのに、八号指定並の“虫”に追われるとは……運がなさ過ぎる。早く“かつこう”が来てくれる事を祈りたいが……。

——そんな願いは虚しく砕け散った。

耳に例の羽音が入る。

次いであのコクワガタが空から舞い降りてきた。止めを刺せる程弱かっているからか、堂々と現れ見下す。

大きく開いたハサミが今は死神の鎌に見える。

「うく——」

流石に死ぬのは嫌なので、最後の悪あがきに“大蜘蛛”を腕から

外し、巨大化させる。

痛いまま死ぬのと、“欠落者”となり痛みを忘れるか。俺に残された結末はこの二つだけ……。

——呆気ないな……。

そう思うと、まるで俺の心情を読んだ様に、コクワガタがハサミを広げて突撃してきた。

ただの巨大な蜘蛛を殺すには十分過ぎる加速力。十分過ぎる得物。下手をしたら“虫”ごと両断されてしまうかもしれない。

それでも腹をくくり、静かに目を閉じる。

死刑の宣告を受けた罪人の様に、ただ来るべき“無”を待つだけだ。

そして……

——“虫”の羽音が一瞬消えた。

“大蜘蛛” 2（後書き）

基本的に勢いで書いているので、変な所があるかも……もし見つかったら報告お願いします。

こついの自分じゃ気付かないものだから……。

“大蜘蛛” 3（前書き）

一人称視点の戦闘はちょっと難しかった……。

“大蜘蛛” 3

「……………」

いつまで経っても来ない痛みや“無”に疑問を感じ、静かに瞼を開く。

そこには信じられない光景があった。

例の“虫”——コクワガタがいた。これだけなら然して当たり前の事だ。だが問題は、そのコクワガタに糸が絡まっていた事だ。

その“糸”とは、無論俺の“虫”の物だ。それがコクワガタの軀を雁字がらめに捕らえ、動きを封じていた。あの小煩かった音を出していた羽ですら、惨めに羽ばたく事すら出来ずに……。

何故こんな状況になったのか考えていたら、不意に“大蜘蛛”に視線が行く。

——まさか、コイツが……？

そう思うと、意図を察したのか“大蜘蛛”の目が動いた……ような気がした。

その視線の先には破れた“蜘蛛の巣”があった。それは普通の物に比べたら遥かに巨大な、しかし薄く細い糸で組まれた結果注視しない限り、決して見抜く事が出来ない物だった。

「そつえば……」

“巣”を作る際、罌も同時に作るのだが、撃退用の他に捕縛用の

罣も作っていた事を忘れていた……。

基本的に撃退用のみが反応する事が多く、多用するのもそちらで、捕縛用はなかなか使わないし引つかからないから、その存在を忘れてしまうのだ……。今回の様に。何せ捕縛用はその性質上、下手をすると味方すら捕らえてしまうから多くは設置出来ないのだ。

「く……はは」

惨めに地面を転がる“虫”、惨めに生き延びた俺。どちらも惨めで無様で、本当に酷いものだ。だからだろう、つい笑ってしまった。

「悪いな」

無様に生き残った俺は容赦なく“虫”に指示を出す。

俺の意思に従い、蜘蛛がその長い脚を振り上げる。

次の瞬間系によって閉じれなくなった羽の“内側”を突き刺した。そして、槍の様に鋭利な脚は意図も簡単にコクワガタの軀を貫く。

甲虫が防御に秀でていると言ったが、それは身を守る殻があるからだ。だが逆を言えば、その下は殻がなければいけない程に脆い。

一度では絶命しなかったのか、“虫”の悲鳴が夜の街に響く。仕方なく、二度三度と貫くとコクワガタの目から光が失われた。恐らく死んだのだろう……。如何に号指定並の力を持っても軀の自由を奪われるば、こんなにもあっさりと殺されてしまう。

「う……」

安心したからか体から力が抜け、そのまま倒れてしまった。折れた左腕から鈍い痛みが伝わるが仕方がない、命あつての物種だろう。

「あ——」

一瞬意識が飛びかけてたが、不穩が物音が聴こえ、辛うじて保つ。満身創痍なのか体は動かず、首だけを音がした方に向ける。そこには、殺したコクワガタを糸で何重にも丸めている“大蜘蛛”の姿があった。

「なんだ……」

『いつもの光景』、それを見て安堵する。“大蜘蛛”は強固な糸で押し潰して小さくした“虫”の団子を、器用に口元に持つていくと『パクツ』という擬音が聞こえそうな程、呆気なく呑み込んだ。

その光景は本来なら異常なのだろうが、俺にとっては既に見慣れた物の一つになっていた。

“大蜘蛛”は自分が倒した“虫”を食べる習性を持っているようだ。もつとも、食べると言っても何処ぞの“不死”の様に喰った“虫”の能力を使えるとかいうチート能力はない。“ただ食べる”それだけだ。

何故こんな事をするのかは一切不明。無指定・号指定を問わず、かれこれ八匹程は食ったはずなのに強くなる予兆すらない所を見ると、やはりただの習性としか思えない。

「やば……」

体力の限界なのか、激しい睡魔が襲う。未だに左腕は痛むが、それより睡魔の方が勝っているらしい。

ゆっくりと瞼が降り、視界が暗闇に覆われる。完全に閉じる際、特環の局員の姿が端に見えた。その姿を確認すると、ようやく終わ

ったのだと安堵し、暗闇に意識が沈んでいった。

“大蜘蛛” 3（後書き）

ようやく戦闘パート終わり。

ちなみに今回は運が良かっただけで、普通に戦ってたら負けてます。

病室（前書き）

ちよつと日常っぽい感じを出そうとしたら失敗したかも…… タグに
キャラ崩壊も追加した方がいいかな……？ キャラが上手く書けな
い……orz

病室

次に目が覚めると、そこは医務室のベッドの上だった。折れた左腕にはご丁寧にギブスが付けられている。此処で「不幸だ」と嘆けば主人公補正とか付かないだろうか……やっぱ止めておこう、代わりにとんでもない事に巻き込まれそうだ。そんなものよりも俺は生存補正が欲しい。

「――痛ッ!？」

自分がどれほどの時間眠っていたのか確認しようと身を起こすと、折れた腕と左の肋から痛みが走る。予想以上の鈍痛に顔がしかめ、身を縮めてしまう。

「おお、ようやく起きたのかねー」

その瞬間、何処かで聴いた高い声が耳に入った。

「それにしてもキミはやっぱ弱いね、もっと精進したまえー」

語尾を伸ばす独特な口調に、この上から目線の偉そうな態度。

――間違いなくあのバカだ。

「……何の用ですか、『ワンコ』さんや」

「ふん」

「がふ!？」

相手の姿を捉える前に半ば条件反射的にそう言った瞬間、後頭部に痛みが走る。多分殴ったのだろっ、あの凶器ホッケースティックで。

「怪我人を殴るか……普通……」

新たに出来た怪我を右手で押さえながら抗議する。つか、病室で長物を振り回すな。

「今のはキミの方に非がある、反省したまえー」

まるで『自分は一切悪くない』という態度で、ベッドの近くにあった椅子に座る。

体は小さいのに態度だけはデカイこの『カップパ娘』は獅子堂戌子。異種二号で“あさぎ”というコードネームを持つ。特殊型の虫憑きで、“かつこう”並の実力者だ。

ちなみに戌子という名前から、大助や俺、一部の東中央支部の方々からは『ワンコ』の愛称で親しまれている。小柄だし見た目も可愛いからそう呼ばれるのだが、当人は酷く嫌っており、特に俺が言うとなんて殴られる。……名付けたのは大助なのに……。

「だって、ワンコはワンコだし……」

「ふん！」

「ふー!?」

今度は額にピンポイントでジャストミート。左腕や肋を狙わない辺り、ある程度は気遣ってくれているのかもしれないが……ピンポ

イントって、めっちゃ痛いんですけど……。

「……なにやってんだ、お前ら……」

俺達のやり取りを見ていたのか“かつこう”……もとい、大助が呆れながら病室に入ってくる。学校帰りなのか制服を着て、右手にはフルーツの入ったカゴが握られている。

「珍しく気が利くではないか、“かつこう”」

「お前のじゃないぞ、ワンコ」

俺と同じく、カゴに視線がいつてた戌子に注意すると、件のカゴはベッド付近の小棚に置かれた。中にはメモ用紙が入っており、丸っこい文字で『見舞いに行けなかった』事と『体を大事にする』事とが書いてあった。

メモ用紙の最後には少し小さく『千莉』と書かれていた。……ホントあの娘は、兄と違っていい娘だよね……。

「だから、そのワンコと言うのを止めたまえー。キミたちがそう呼ぶから皆ボクの事を小動物扱いするのだ、責任を取りたまえー」

人知れず、千莉の優しさを噛みしめていると、同じ女の子でも少々……というかなかなり(?)やんちゃな戌子が、膨れっ面で抗議していた。正直、童顔で可愛いから見ていただけなら怖くはないのだが……後で色々としごかれそうなので、仕方なく保険を掛けておこう。

「なら、謝罪の意を込め、この大助をあげよう」

「オイ！」

いつもとは逆に俺の方が偉そうな態度を取り、近くにいた大助を引っ張って言った。

「いるかそんなもの!!」

だが、怒り狂ったワンコには効かなかったらしく、一蹴されてしまっ。

「え……一体何が不満なんだ、ワンコ？」

「何だ、その『まさか断られるとは思わなかった』みたいな顔は！それに言ったそばからまたワンコと……キミは反省という言葉を知らないのか！」

「うん！」

「無駄に良い笑顔で頷くなー!!」

爽やかな笑顔で頷いた俺に戌子は憤りを感じたらしい。しかし悪ノリに関して言えば、俺に『自重』や『反省』という文字はない。まあ、なんだかんだでノリのいいワンコは下らないコントに付き合ってくれるから好きだ。

「お前らな……」

それに比べ、大助は深くため息を吐いていた。

「ノリワリいぞ、大助え」

「うむ、相変わらず空気を読まないなあ、キミは」

さつきとは一変して、矛先は大助に変わった。

「何でオレが悪い流れになつてんだ……」

その後——暫く大助を弄つた後、二人は歸つたのだが……退室の時「怪我が治つたら再特訓だから覚悟したまえ」と嬉々として不吉な事をワソコが言い残していた。

うわぁ……治りたくねえ……。

病室（後書き）

ワンコこと戌子を出してみた。上手く書けずちよっとキャラが違くなったかも……。

ちなみに、今はbug本編開始の半年〜一年近く前の予定なので、ワンコは東中央にいると仮定して書きました。

……まあ、正直言うと戌子が好きだから、出したただけなんだけどね……。

そういえば……bug開始の時期っていつだったかな……それによって元の行動を変えなくては……。

夢（前書き）

書く時間が……ない……orz

夢

——きっかけは些細な事だった。

この世界で飼っていた犬が死んだ、ただそれだけの事。だが、愛着のある身近なものが『死んだ』——それが俺にある強い想いを生んでしまった。

一度芽吹いた『それ』は瞬く間に俺の思考を乗っ取り、日に日に肥大化していった。そして、『それ』は“大喰い”を呼ぶ程にまで膨れあがっていた。

——貴方の夢をきかせてくれない？

『夢』かどうかは今でも分からない。でも『失う』事を恐れた俺はその問いに応えた……応えてしまった。

——大切なモノを失わないこと。

そう応えた直後意識が途切れ、次に目が覚めた時には“虫憑き”と呼ばれる存在になっていた……。

「あぐツ!？」

頭に激しい痛みが走り、意識が現実へ戻る。

視界が暗闇から色を取り戻すと、目に入っただけは見慣れた訓練所の天井だった。この時点で俺が倒れているのはよく分かった。ひんやりとした床が背中当たって気持ちいい。

「目が覚めたかねー、全くキミは本当に弱いな」

次に目に入っただのは黄色いカップとホットケーキスティック。そこでようやく思い出した。

——俺は戌子の特訓を受けてたんだっけ……。

左腕を骨折し、肋骨も三本折れていた俺だったが、偶々こつちに來ていた他の支部の治癒能力を持った局員に治され、一週間も経たない内にベッドから追い出された。

そんな病み上がりの俺に待っていたのは、地獄のような戌子との特訓の日々。完治しているとはいえ、一応安静にしているよう言われたのだが……。

——敵はそんな事を言っても、待つてはくれないぞ。

と軽く一蹴して、訓練所に引つ張り出された……。正直、戌子の訓練は冗談抜きでキツイので、自分から志願する以外は極力勘弁して欲しい……。

しかし、戌子本人はそんな事はお構い無しに毎日俺を引き摺っていく。逃げようとしたが……残像残す程の高速で動くヤツからどう逃げると……。おまけにアイツとは付き合いが長い為か、俺の性格を熟知しており、罠の類いもほとんど意味をなさない。

つまるところ、俺は詰んだ状態だった訳で、仕方なく訓練を受ける事になった……。ほぼ一週間ぶつ通しで。飯食う時と寝る時以外は基本訓練。いや本気で死ぬかと思った……。現に今だって意識を失っていた訳だし……。

おかげで懐かしい夢を見てしまった。

「ん？ ちゃんと起きているかね、返事をしたまえー」

返事がないからか、疑問に思った戌子はホッケースティックを振り上げる。

「待て待て！！ ちゃんと起きてるから、意識あるから！ だからそのホッケースティックは降ろせて！！」

「ふむ……そうか……」

「何でそこで残念な顔をするんだよ！！」

ホッケースティックを振り上げた時には嬉々としていた表情が一瞬で変わる。しょんぼりという言葉が合う程影が落ちた。……そこまでして殴りたいのか、コイツは……。

そんな事を思いながらも、長いようで短かつ………凄く長かつた戌子との特訓がようやく終わったのだった。

夢（後書き）

今回はちょっと元の夢について触れました。

どんなモノでも必ず終わりがあるから、かなりの無茶なのは元自身もそれは分かってるんですけど、その想いが消えずに月日が経ち『夢』と呼ばれるまでに成長した。そんな感じの内容です。

一応、“虫”が蜘蛛である理由も此処にありますかね……縛りつけてでも無くさない様に、といった感じで……アレ？　これ、何処のヤンデレの思こ（ry

『弟子』（前書き）

久しぶりの投稿！

べ、別に忘れていたとか、そんな事ないんだからね！
……ちょっと、無駄に長くなったかも……。

『弟子』

○月 日

唐突だが、戌子が中央本部の異動になっただけらしい。

詳しい事情は知らないし、元々原作でも中央本部所属になっていたから、何時かは行くのだろうとは思っていたが……いきなりの事で少し戸惑ってしまった。

何せ大助と同じで、特環に所属してから長い付き合いだ。今生の別れではないとはいえ、やはり寂しく感じてしまう。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、俺がこの話を聞いた時には戌子は既に東中央支部を発った後だった。……というか、あの特訓のすぐ後に発った様だ。本当はもう少し早めに発つ予定だったらしいが、無理を言っただけで伸ばしたとの事。そうした原因は……俺だった。

なんでも、「弟子があまりに弱すぎて、このままでは心配で引き返してしまう」との事……大きなお世話だ、バカ師匠……。

「はあ……」

日記を一段落させると背伸びをする。背中の骨がポキポキとなり、自然とため息が漏れる。

指が疲れる……こういうのは手書きよりもパソコンやケータイでやった方が楽かもしれないが、電子機器は壊れ易いし、ハッキングされる場合もあるから、支部長から『駄目』と言われてるんだよな。

「はあ……」

またため息が漏れる。

最近……てか、戌子がいなくなってから増えてきた。多分、寂しいのだろう……アイツとはそれなりに付き合いも長かったし……

「弟子、か……」

- - ちよつと昔話をしよう。

俺はアイツに鍛えられてはいるが『生徒』ではなく『弟子』という分類に入るらしい。それというのも、最初に戌子に教えを請いたのは俺だったからだ。

原作を知っていた俺は誰に鍛えられれば早く、強くなれるか知っていた。だから戌子に頼んだのだが……今にして思えば、かなり危ない事をしたものだ。

当時の戌子は今ほど柔らかい(?)性格ではなく、どちらかというと殺伐としていた。虫憑きになったばかりで精神が不安定な状態だったからだ。そんな状態のアイツにいきなり『強くしてくれ』と頼むのはどう考えても自殺行為であり、事実何度か殺され欠けた。

いつもの俺ならその時点で諦めていた、命が惜しいから……。だが、当時の俺はそんなのになりふり構っていられない状態だった、ある任務で自分がどれほど弱いのか痛感したから……。だから強くなりたかった。その一心でひたすら頭を下げ続けた。プライドとか羞恥心は一切捨てて、くる日もくる日も頭を下げて……。そしてようやく戌子は折れ、俺はアイツの『弟子』になった。

それからは本当に死にもの狂いだった。ただひたすら強くなる事を願い、地獄の様な日々を過ごした。

心が折れ欠けたら『あの時』の事を思い出し、強くなる事を渴望した。弱いのはもう嫌だったから……。

結果として、多少は強くなれたと思う。でも、それでも大助や成子の足元には及ばない。比べる相手が悪いのかもしれないが、俺の近くにいる奴らは号指定を受けている者が多い。だから格上の比べれる相手と言ったらそいつらしいないのだ。

「……なんか、疲れたな……」

無駄に色々な事を思い出して、少し疲れた。気分転換に外の空気でも吸ってこようと思い、椅子から立ち上がると同時にケータイの着信音が鳴り響く。

『おつはよーございます！ みんなのアイドル“まいまい”ちゃんの熱いラブコールのお時間でちゅー！ ……か、噛んでませんよ、アウトに見えるけど実はセー……』

- - ぶつ……。

通話ボタンを押すと、うざい程ハイテンションな声がケータイから聴こえたので、つい切ってしまった。その直後、コンコンと扉をノックする音が耳に入る。

ちよつとシリアスになっていた心が一瞬でいつものペースに戻った。そうした原因は未だに扉を叩き、且つケータイにも電話する。

何故こうも騒がしいのかと思い、目覚まし時計に目を向けると時刻は既に八時を回っていた。

「……ああ……」

理由が何となく分かった俺は、『仕方ないか』と思いつつながらもケ
ータイを手を取った。

『弟子』（後書き）

心理描写がちと難い……。

あ、戌子とのフラグは多分ないから。何というか……大助含めての三人組みたいな感じにしたかっただけ。ちなみ、仲良しかどうかはともかく、大助は弄られポジション。

朝食（前書き）

壊れたケータイが帰ってきたので試しに書いてみた……スライド式
なのにキーが大きく感じた……。

朝食

『いただきます！』

ケータイから聞こえる声に呼応する様に“まいまい”は合掌をし、食事を始めた。

目の前でガツガツと朝食を食らう眼帯少女を余所に、俺も自分の食事を取る事にした。

“まいまい”があれだけ騒いでいた理由は至ってシンプル。『お腹が空いた』という有り体で至極普通な物だった。

それを聴いた時『勝手に作って食べればいい』。そう思ったが、“まいまい”に作らせたらどんな劇薬が出来上がるか分かったものじゃない。仮に、まともな物が出来ても恐らく台所は大惨事となり、後片付けをするのは自分だろう。

そう考えると、最初から素直に俺が作った方がマシだ。考えが纏まるとすぐに始め、九時前には終わった。

『“大蜘蛛”さんにこんな特技があるとは驚きです！“まいまい”ちゃんが星三つあげます、ふれぜんとふぉーゆーすたー！』

即席で作ったスクランブルエッグに舌鼓を打ちながら“まいまい”は不慣れな英語っぽいものを使う。多分、意味とかは分かっていないのだろう……。

ちなみに今日の朝食は時間がなかった事もあり、トーストとスクランブルエッグと簡素なサラダだけだ。正直、誰でも作れる簡単な物で、味もそこまでいいとは言えないと思うが、“まいまい”は上

機嫌に食べ続けている。

「あんがと」

悪い気はしないので素直にそう返すと、残っていたトーストの一切れを食べ、完食する。

『ごちそうさまでした、美味しかったです！』

「お粗末さま」

数分後、“まいまい”も食べ終わると食器を洗い、出かける用意をする。

『お出かけですか？　なら“まいまい”ちゃんも行きます！　れつつショッピングです！』

「……………」

『いたたたた！！　何故無言でぼっぺをつねるんですか！？』

「………… お前、何で俺達が此処にいるのかちゃんと理解しているか？」

そう訊くと肝心の“まいまい”は小首を傾げる。このやろっ…………。

『痛い痛い痛い！　痛いです！！　何故ぐりぐりされなくてはいけないのか“まいまい”ちゃんは説明を求め…………て、更に威力がー！！』

それから数分後、手が疲れたので離すと、“まいまい”は頭を抑えながらふらふらと数歩程歩くと、パタリと倒れてしまった。……軟弱者め。

朝食（後書き）

“まいまい”のキャラがうまく掴めない……orz

外出（前書き）

メール送信した後、更新するのすっかり忘れてた……orz

外出

成子が発つてから僅か三日後、俺は東中央支部の支部長に呼び出された。理由は至って簡単、任務だ。

内容はある事についての調査で、既に手回しは終わっているらしい。仕事が早いのは性分な所もあるが、俺から拒否権を奪う意味でもあったのだろう。俺は“かつこう”とは違い、任務に積極的ではないから危険だと感じた物は極力関わらない様にしている。一応、自分の実力くらいは分かっているつもりだ。

ちなみに、今回はサポートが付くとか言っていた。号指定を寄越せとまでは言わないが、せめてまともなヤツを期待していたのだが……。

「現実はこちらだ……」

“まいまい”という荷物を持たされてしまった……。いや、正直“まいまい”の能力は使えるには使えるのだが……。

『あー！？ 見て下さい、“大蜘蛛”さん！！ 平日だから何処も空いていますよ！ さあ、れつつショッピングです！』

当の本人はこれだ。わざわざ外に出て来たつてのに、コイツは……。

「……………」

『あぐー！？ む、無言でぐりぐりしないで下さいー！ー！』

本当に懲りているのか、些か不明だが周りから視線を向けられている事に気付き、手を離す。

別段、怪しまれてはいないみたいだが、何処か暖かい目付きだった。どうやら“まいまい”とは兄妹と思われるらしく、今のやり取りも兄妹ならではのコミュニケーションと思われた様だ。

「……はぁ……」

よりによって兄妹と見られるとは……俺はそんなに、このハイテンション眼帯馬鹿と似ているのだろうか？ 軽く鬱になる……。

現在、俺達は生活しているマンションを出、街を詮索している最中だった。

「一応、言っておくがコードネームで呼ぶなよ」

今回は監視任務とかではない為学校に行く事はない、その為比較的休日より人が少ない街道を二人で歩く。そんな中“まいまい”に注意する様に告げる。

『はい！ わかりました、“大蜘蛛”さ……』

「ふん！」

『ん……！！！！』

が、言ったそばからこれだ……。罰として拳骨を喰らわされた頭を抑える“まいまい”に、追い討

ちで眉間を中指の第二関節部でぐりぐりと押し付ける。

『あ~~~~う~~~~!!』

「三歩歩けば忘れる鳥頭か？ お前は」

『ご、ごめんなさいー！ で、でも“大蜘蛛”さんの本名知りませんし……』

「……ああ」

その言葉を聞き、特環局員の個人情報が嚴重に管理されている事を思い出した。それにコードネームとは本来、素性がばれない為にあるものだ。いつもそのコードネームで呼びあっている俺達がお互いの名前を知らないのはある意味当然の事だった。

「……元」

『え……？』

「三野元。それが俺の名前だよ」

呆気なく名乗った俺を“まいまい”はぽかーんとした表情で見つめる。

まあ、“まいまい”の気持ちは分かる。正直俺も言うべきかどうか悩んだが、言わなかったらいつまでもコードネームで呼ぶのは分かり切っている。だから正直に言う事にした……口の軽い“まいまい”だから少し心配ではあるが……。

『元さん、ですか……では、“まいまい”ちゃんも……』

「あ、お前はいいや。今更だし」

『わっつ！？ まさかの拒否されました！』

信じられないといった様子で驚く。あんまり興味がないから仕方ない……てか、まず第一に。

「コードネームをそのままペンネームにしてネットアイドルしているヤツは何処のどいつだ」

『ギクリ……』

「しまった」と言わんばかりの表情を浮かべた“まいまい”だったが、次の瞬間にはしらを切ろうと視線を明後日の方へと向ける。

「まあ、支部長が何も言わないようだから、俺もとやかく言つつもりもないけどな」

中央本部なら確実に罰則食らって何処かやばい所に飛ばされそうだが、生憎^{ウチ}東中央支部はそういう所は変に寛容だから大丈夫だろう……代わりに、あの支部長の毒舌を食らう羽目になるだろうが。

『ふう……何とか誤魔化せました』

本気で誤魔化せたと思っている“まいまい”は、本人の前で安堵の息を漏らす。……もう、この時点で色々駄目だろ……。

「……………」

『で、あー！？ 待って下さい、お……元さん！！』

相手をするのに疲れた俺は、いつの間にか歩いていたらしく。それに気付いた“まいまい”は慌てて後を追って来る。

客観的に見ると、確かに俺達は兄妹の様に見えてしまうのかも知れない…… 凄く不本意だが。

外出（後書き）

“まいまい”の本名知らないの
で“まいまい”のままいきます。

外出2（前書き）

最近、サブタイをムシウタっぽく変えようかと思っている今日この頃。

外出2

「で、調子はどうだ？」

あれから多少時間が経ち、現在俺達はあるファミレスにいた。昼
時で腹が減ったという理由もあるが、最もな理由は“まいまい”の
能力を引き出す事にある。

“まいまい”の能力は機械に自分の“虫”を潜り込ませて操るも
のだ。今はまだいない電気そのものを触媒とする“C”と比べると
性能は劣るものの、使い方次第では情報を抜き取る事も可能なはず
なのだ……本来なら。

『ま……待つて下さい！ 今、いい所なんです。この人が大きく打
つてくれれば逆転出来るんです！』

……が、肝心の“まいまい”はこれだ。

後ろのテーブルに座っている人のケータイテレビに野球の映像が
映っている。ツアウト、ツーストライク、スリーボールで満塁、
まるで絵に描いた様な光景だ。おまけに点数は三点差で、満塁なの
は無論負けている方だ。

素晴らしい程のアニメ的展開に、内心俺も気になる……が。

「はっはっは……おい、“まいまい”。その無用な事しか考えられ
ない頭、いらないよな？ ……俺が握り潰してやるよ」

無防備に晒されている後頭部をガッチリホールドすると、徐々に
力を加えていく。

『のおーっ！？ “まいまい” ちゃん、未だかつてない程の命の危機に瀕していますー！』

「分かってるんなら真面目にやれ！ 本当に前線送りにされても知らないからな、俺は！」

いつまで経つてもふざけている“まいまい”にいい加減腹が立ち、つい“まいまい”のタブーに触れてしまった。

しまったと思うも時既に遅く、“まいまい”の体はぶるぶると震えている。

『う……ううう……戦いは嫌です……怖いです……痛いのは、いやあ……』

……完全に鬱モードに入ってしまった……。

“虫憑き”は大抵何かしらのトラウマを持っている者が多い。それがなる前か後は知らないが、彼らの境遇を考えれば仕方ない事だろう……しかし、その中でも特に特殊型は顕著だ。

原因は特殊型を生み出す原虫——“侵父”と見て間違いないだろう。アイツは歪んだ夢が好きだから、人の精神に揺さぶりを掛けて夢が歪んだ後“虫憑き”にする。だから特殊型は結構歪んだり狂ったりしたヤツが多いし、“まいまい”みたいにトラウマが悪化する場合もある。まあ……コイツの場合は元々家庭内で問題があったみたいだから尚か……。

「あ……と、その、ゴメン、悪かった……さっきのは冗談というか……やる気を出す為と言うか……」

『えぐ……』

幾ら謝りの言葉を並べても、返ってくるのは泣き声だけ。正直、子どもの扱いは苦手なので既にお手上げ状態だ。だが、任務がある以上このままにしておく訳にもいかない……。

「……はあ……わかったよ、もう……」

あまり無責任な事は言いたくはないが、今回ばかりは俺も悪いし……仕方ないか……。

「前線に送られる様な事態には俺がしないから、いい加減泣き止んでくれ……」

『えぐ……本当、ですか……？』

若干投げやり気味にそう言うと、“まいまい”の動きが止まり、確認の為に訊いてくる。

「ああ。俺と組んでる間はその事にはさせないし、目に見える範囲でなら守ってやるから」

『ぐず……わ、わかりました……』

涙を拭って頷くと、近くにあった紙ナプキンで鼻をかむ。一枚では足りなかったのか、二枚目も使う。

『えっと……す、捨ててきまーす！』

居た堪れなくなったのか、“まいまい”は鼻をかんでくしゃくしゃになった紙ナプキンを片手に席を立つ。

「お待たせいたしました」

そして、入れ替わりに店員が料理を持ってきた。空気を読んだのかタイミングがかなりいい。

料理は二人分運ばれてきたが、肝心の“まいまい”はいない。仕方なく、一人寂しくフォークでパスタを絡めとる。

「ん？」

その瞬間まだ完成し切っていない“巢”に反応があった。

糸が切れる感覚が二つ。一つは此処より少しばかり離れた場所。もう一つは意外と近く、現在俺らの居るファミレスの道路を挟んだ向かい側、そのデパートの屋上………って。

「近過ぎだろ！　おい！」

あまりの超至近距離に、此処がファミレスであった事も忘れ、俺は一人声を張り席を立てていた。

外出2（後書き）

今更だけど、暫くはオリジナル展開で行きます。予定ではこれが終わった後、bugへ。大助とは遅れて合流させようかな……と『現在』考え中。

オリジナルの虫と虫憑きも出す予定。最低でも三人は出す、味方がどうかはさて置いて……。

前書きでも書いたけど、サブタイどうしようかな……ちなみに現在のオリジナルストーリーにムシウタっぽい感じのをつけるなら『夢移る底王』になると思う。

……さて、どうしよう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5256v/>

ムシウタ ～夢捕らえる蜘蛛～

2011年11月8日07時20分発行